異国 日本 の地に立って

守屋留学生交流協会
奨学生の記

「違いを受け入れる」ことの大切さ

～日本とインドネシアをつなぐために～

公益財団法人
守屋留学生交流協会
第44回奨学生

リフキ ムハマド ハフィド

— 略歴 —

2001年　インドネシア・チレゴン市生まれ
2016年　チカル・ハラパン第一中学校（南タンゲラン）卒業
2019年　南タンゲラン第7国立高等学校卒業
2019年　拓殖大学別科日本語教育課程入学
2021年　拓殖大学商学部国際ビジネス学科入学
2025年　拓殖大学大学院国際協力学研究科国際開発専攻博士前期課程入学（在学中）

◎南タンゲランの生活・文化

私はインドネシア・バンテン州チレゴン市で生まれ、学生時代は南タンゲラン市で過ごしました。南タンゲランは首都ジャカルタに隣接する都市であり、商業やサービス業が発展し、ショッピングモールや住宅地が広がっています。近年は都市開発が進み、多くの人がジャカルタへ通勤するベッドタウンとして発展しています。

私が幼い頃、両親はジャカルタで働いており、私は祖父母と暮らしていました。平日は祖父母と過ごし、週末には家族全員が集まる生活でした。そのため、家族で食事を囲む時間は、大切な思い出であり、家族の絆や支え合いの大切さを学ぶ機会でした。

南タンゲランは、都市部である一方で、人と人との距離が近く、地域のつながりが強いという特徴もあります。私が育った地域にも、近所同士で助け合う文化があり、日常生活の中で自然とコミュニティーの温かさを感じることができました。

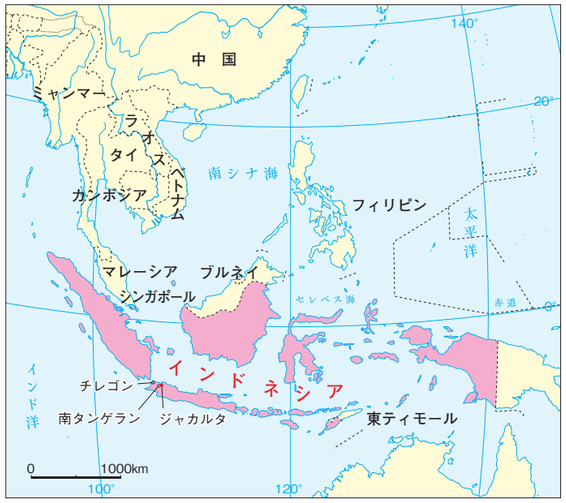
このように、都市と生活が密接に結び付いた環境の中で私は育ちました。

◎インドネシアの教育事情

私の高校時代には、多くの生徒がバイクなどで通学していました。昼間の気温がかなり高くなるため、授業は午前6時30分ごろに始まり、午後3時ごろまで続きます。長い時間を学校で過ごす中で、友人と協力して課題に取り組んだり、休み時間に会話を楽しんだりする日常を送りました。

インドネシアの教育は、日本と比べると比較的自由な雰囲気があり、授業中に自分の意見を発言する機会が多いことが特徴です。教師と生徒の距離も近く、活発なコミュニケーションが行われています。また、グループ活動が多く、自分の意見を発表するだけでなく、他者の意見を尊重する姿勢を学ぶ機会も多くあります。このような経験は、私の現在の異文化理解にもつながっていると感じています。

近年のインドネシアでは、オンライン学習の普及や教育のデジタル化が進んでおり、教育環境は大きく変化しています。都市部を中心に教育の質も向上しており、語学学習アプリやオンライン講座などを通して、学校以外でも学ぶ機会が増えています。



◎日本留学の理由・背景

私が日本に留学しようと考えた理由は、日本の文化や社会に対する関心と、自分自身を成長させたいという思いからでした。また、日本語を習得し、異なる文化の中で生活することは、自分の視野を広げる大きな機会になると考え、留学を決意しました。

南タンゲラン市とタンゲラン県にまたがるBSDシティ。インフラと緑地が高度に整備された計画都市で、ジャカルタのベッドタウンであり、今では大企業のサテライトオフィスも多数進出している。(写真：Alamy ／アフロ)

高校時代。インドネシアの独立記念日（8月17日）に伝統衣装のバティック（ろうけつ染めの布地）のシャツを着て友人と。

未知の環境に対する不安もありましたが、それ以上に新しい経験をしたいという思いが強くありました。

◎異文化理解

日本での生活を始めた当初、私は時間や規律に対する意識の違いに衝撃を受けました。特に驚いたのは、電車がほぼ毎日時間通りに運行していることです。インドネシアでは交通渋滞などの影響により遅れることも珍しくないため、時間に対する日本社会の意識の高さを実感しました。また、ゴミ出しの曜日や分別方法が細かく決められていることにも驚きました。来日当初はそのルールの多さに戸惑いましたが、地域の人々がルールを守ることで、清潔で快適な生活環境が維持されていることを理解し、責任感や協調性の重要性を学びました。

また、異文化の中で生活することで、「違いを受け入れる姿勢」の重要性を強く実感しました。言語や文化の違いは時に壁になりますが、相手を理解しようとする姿勢があれば、その壁を乗り越えることができると感じています。

◎研究テーマについて

現在、私は大学院で国際開発を専攻し、日本における労働力不足とインドネシア人労働者の可能性について研究しています。日本では少子高齢化により、介護や建設、農業などの分野で人手不足が深刻化しています。一方で、インドネシアには若く意欲的な労働力が豊富に存在しています。

インドネシア人労働者の就労先としては、近年は日本の他にオーストラリアや台湾なども人気があります。円安の影響もありますが、それでも日本を希望する人は依然として多いです。その理由としては、両国が長年にわたり良好な外交関係を築いていること、日本の四季が魅力の一つとなっていることがあると思います。雪が降る冬や桜が咲く春など、インドネシアではなかなか体験できない自然や文化に憧れを抱く人も少なくありません。さらに、日本の職場における規律正しさや時間厳守の文化は、インドネシア人にとって学ぶ価値のあるものとして認識されています。

私は、日本での経験を通して、外国人労働者の重要性を実感するとともに、言語や文化・宗教の違いによる課題にも気付きました。例えば、外国人にとって日本語の敬語表現や職場特有の言い回しは難しいこと、日本には相手の気持ちや場の雰囲気を読み取る「空気を読む」という文化があることです。自分の意見を比較的率直に伝えるインドネシアの文化との違いに戸惑う人も少なくありません。また、インドネシア人の多くはムスリムであり、日本で働く上での課題を感じることもあります。イスラームでは1日に5回の礼拝を行う習慣がありますが、会社によっては勤務中の礼拝が難しい場合もあります。

このような経験が、現在の研究テーマを選んだ大きなきっかけとなっています。

◎今後の目標

私の研究は、単なる労働力の補完ではなく、異なる文化を持つ人々が共に働き、互いに理解し合える社会の実現を目指しています。

将来的には、日本とインドネシアをつなぐ架け橋となり、両国にとって有益な関係を築くことに貢献したいと考えています。